

## 保育者になったころ (2)

# 保育者へのはじまり

岸井慶子

少し恥ずかしいけれど、自分の勤め始めたころの、印象に残ることを書いてみます。私は昭和四十九年四月、東京都公立幼稚園（中野区立みずのとう幼稚園）の教諭になりました。担任になったといっても、それは辞令をもらったというだけのことで、「保育者」といえるのかどうか。配属先の幼稚園の園舎そのものもまだ完成しておらず、一か月近くの間、区役所の一室で仕事をしました。

### 新設幼稚園ではじまり

新しい幼稚園が誕生する時に保育者としてスタートできたことは、後々考えてもとても学ぶことが多かったといえます。教育目標を考えたり、学級の名前を考えたり、職員室の備品の配置を考えたり。何もかも最初から職員員みんなで話し合い、決めていきました。実際は、私など、ちんぷんかんぷんの話

で、聞いているばかりのことが多かったのですが、何事にも「意味」や「保育者たちの願い」が込められているのだということを実感できました。限られた予算の中で、最低限どんな遊具や絵本を、どのくらいそろえたらよいか、などは保育者の保育観や力量が如実に現れるということに気づかされました。

### OL経験、既婚、寄り道経験者

私は幼稚園に就職する前に、金融関係の会社に四年間勤めていました。あの時代なので、いわゆる男性の補助的な仕事を中心の毎日でした。そこで心機一転（詳しく書くと紙幅が足りなくなります）、たまたま見つけた保育専門学校の二次募集で入学し、幼稚園教諭免許と保育資格を取りました。そのため、一緒に採用された同期や、すぐ上の先輩よりも年齢は上。しかも既婚者で、二年目には産休（育児

休暇はまだなかった）を取るという、ちょっとねじれた存在でした。そのころは、まだ既婚者の少ない職場で、園長先生をはじめとして八人の教員中、既婚者は新婚一か月の先輩と私の二名だけでした。

正直なところ、ほかの方々に比べ学習内容も志や熱意も恥ずかしいほど貧弱な私でした。後に「岸井さんは亜流だ」と、ある園長先生から指摘されましたが、そうなのかもしれません。ともかく、寄り道経験者だった私は、一般の会社と幼稚園の職場文化の違いに驚いたり、会社時代には当たり前だった行動をとって、園長先生から注意を受けたりしたこともあります。この時期に感じた違和感は、何となく「幼稚園業界」に対して距離を置いて見るクセの基になったかもしれません。

また、自分の出産体験を通して、「他人の子どもをよりよく育てようとする職場が、仕事をしながら自分の子どもを育てられないような職場だとした

ら、何か変ではないか」「幼稚園の教師である前に、普通の人間としてありたい」などの思いを強くもちました。生意気な教師だったことは間違いありません。

「こんなに大切なものだった…」

二年目に長男が誕生しました。出産直後、胸に抱かせてもらいましたが、すぐに疲労困憊して寝入ってしまった。翌朝、陽光の差し込む病室の私の傍らに長男が連れてこられました。その顔を見た時に、「私は、何て大事な、何て大切なものを預からせてもらっていたのだろう」と、心の底から湧き上がってくる声を聞きました。

それまでも、決しておろそかにしたつもりはないけれど、毎日の保育の中で一人ひとりを大切にしてきたつもりではあるけれど、それでもなお、「こんなにも大切なものだった」と強く感じた時のことを

今でも鮮明に覚えています。

駅までの帰り道は

私の保育カンファレンス

幼稚園から最寄りの駅までは、バスで二、三停留所の距離。忙しい朝はバスに乗りますが、帰り道は、同じ方向に帰る先輩（確か十年くらいの経験者）と、いろいろな話をしながら駅まで歩くのがいつもの間にか習慣になりました。歩きながら、いろいろな話を聞くことができました。先程まで幼稚園で行われていた会議では聞けなかったような具体的な内容について、細かく確認することもできました。マンツーマンの保育指導です。「明日、こんな活動をやるのだけれど、どんなふうにしたらいいのでしょうか」「保護者会では最初に何とあいさつし、会を進めたらいいのでしょうか」「こんなお母さんがい



たけれど……。〇〇ちゃんがこうなのだけれど……」など、初任者ならではの保育の相談だけではありません。おいしいおでんの作り方、遅く帰ってもすぐできるお惣菜の作り方、人間関係の複雑さや礼儀、そのほか多くを教えられました。

この帰り道の対話の中で、私はいくつもの「なるほど」と心の底から納得する体験、「目からうろこが落ちる」ような体験をしました。保育実践には、何時間もかけて、ねらいを話し合ったり手順を確認したりするフォーマルな会議だけでは伝わらないものがあるのではないのでしょうか。保育の本質的なものが表れるのは対話の中かもしれません。保育者が、保育者になるのを手助けできるのは、信頼できる身近な保育者との対話ではないのでしょうか。

### 聞き耳頭巾をかぶった

三年くらい経験したあとのこと。ある朝、いつも

より遅く、二階にある自分の保育室（二年保育五歳児）へ走っていきました。保育室には半数近くの子どもたちが登園し、自分たちでそれぞれ所持品を始末していました。そこまではいつもと変わらなかつたのですが、急に子どもたちの何気ない「会話」が耳に入ってきました。「きのう、おもしろかったね。（家に帰って）あそんでたのしかったね」「……まぢあわせしよう……」。たわいもない会話ですが、なぜか、ぞぞつと鳥肌がたつほどの感覚でした。「こんなことを子どもたちは話しているのか」「こんなことを考えたり感じたりしているんだ」。急に子どもたちの体温を感じたのです。

昔話にある、「聞き耳頭巾をかぶると小鳥の話が聞こえるおじいさん」のように、少しだけ子どもの話が聞こえるようになったと思います。きつとそれまでは、自分ばかりが話していたのでしよう。自分に話しかけてくる言葉や質問だけを聞いていたのだ

と思います。「子どもは生きてるんだ、子どもは考  
えているんだ、子どもには子どもの世界があるん  
だ」。大げさに言うとは、そんな当たり前のことを何  
年もかかって実感した、その最初の忘れられない出  
来事でした。

### 意見が言えなくて泣いたこと

楽しいことばかりではありませんでした。話し合  
いの中で黙ってばかりいる私に、「岸井さんも何か  
言いなさい。いくら経験がなくても、学級の担任な  
のだから」と厳しく言われ、涙があふれました。急  
いで自分の保育室へ行き、泣いたことを覚えていま  
す。意見が全く言えないことが情けなかったので  
す。その後も、常に自分の考えを表すよう求められ  
続けたと思います。そういう雰囲気幼稚園中に満  
ちていました。私をはじめとした若い人の不完全な  
意見でも、先輩にその意味や言葉の足りなさを補っ

てもらうことができました。多分このような厳しい  
促しと温かい支えがなかったら、私は黙って人の話  
を要領よく聞き、周囲の風向きに合わせた意見をあ  
とからおずおずと述べるような人間のままだったと  
思います。「えっ、なぜ？ どうして？ 本当  
に？」と疑う議論好き(?)の芽は、このころから  
伸び始めたようです。先輩方に感謝しています。

### 初めての授業研究、公開保育

一年目から授業研究がありました。六月ごろから  
順番に、全員が授業を園内で公開します。全員の先  
生の見ている前で緊張して、何を言ったか、やった  
か覚えていないほど。産休明け直後にも、放送教育  
の大きな公開保育が待っていました。嫌だとか、や  
りたくないなどと思う暇もないほど、園内研究や保  
育公開は当たり前のこととされた園の雰囲気でした。

## 次第に、保育者になっていく

ここまで書きながらふと考えます。「保育者になりたてのころ」とは、一体いつのころまでを言うのでしょうか。

職業身分としての保育者は別として、子どもとのかかわりの中で生まれる保育者は、その時々の子どもと出会い、その子を受け入れ、その子に寄り添い、その子に受け入れてもらって初めて保育者となるのだと思います。

その意味で、今でも保育者になろうとしている私があります。眼前のその子にとっての保育者になろうと願い、その子にとっての保育者にしてもらえるかどうかを考えています。完了形ではなく進行形として保育者になっていくとし続けているのです。若くても、経験を重ねたあとでも、どの時期にも価値があります。一生懸命「保育者になろう」と精一杯

努力するその時々姿に、優劣はないと思います。新米と言われる時期も、熟達者と言われる時期も、みんな子どもから見れば同じでしょう。

## 私を育ててくれた子どもたちに感謝

初めての担任は二年保育四歳児四十人。さまざまなきが思い浮かびます。私を悩ませたり困らせたり楽しませてくれたりしました。高い塀をよじ登って家に帰ってしまった子、お弁当は職員室でしか食べなかつた子。障害をもつた子どもとの出会いや、その子と一緒に育ち合う子どもたちの姿に多くを教えられ、保育者として育てられてきました。生真面目といえは聞こえがいいのですが、自分の計画に子どもをいかに引き入れようかと考える私が、アバウトというか出たとこ勝負（？）的な考え方が少しできるようになってきたのも、子どもたちのおかげです。感謝。感謝。